

会计学大辞典

第三版

編集代表

番場嘉一郎

編集

新井益太郎

岡本 清

武田昌輔

中村 忠

森田哲彌

中央経済社



会计学大辞典（第三版）

昭和46年1月30日 初版発行
昭和54年4月1日 新版発行
昭和57年10月25日 第三版発行

編集代表	番 場 嘉 一 郎
発 行 者	渡 辺 正 一
印 刷 所	三栄印刷株式会社
製 本 所	誠 製 本
発 行 所	株式 中央経済社

東京都千代田区神田神保町1-31-2

電 話 (293) 3371(編集)

(293) 3381(営業)

〒101 振替口座・東京 0-8 4 3 2

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-481-10326-4 C3534

第三版の刊行に当って

会計学界の方々を中心とし、経理の実務家、幅広い隣接科学領域の権威者を含む 276 名のご協力をえて「会計学大辞典」を発刊したのは昭和46年のことであります。昭和54年にはこれに 400 項目を追加して約 3,500 項目を収容する増補新版を世に問いました。幸いにして本辞典は多大の好評をばくし、ひろく江湖に迎えられ、学者は勿論、実務家、職業会計人、学生などの間に、絶対に信頼の置ける辞典として定着してまいりました。編集代表としての慶びこれに過ぎるものはありません。

最近における会計制度ならびに会計理論の変貌・発展はまことに目を見張るものがあります。とくに情報化時代の巨濤は制度会計にも波及し、昨年から本年にかけて開示制度の拡充を一つの大きな柱とする商法改正、具体的には営業報告書の規制、計算書類注記の増加、附属明細書の拡張、監査報告書規則の制定が行われました。これと併行して企業会計原則の改訂整備が進められ、「財務諸表規則」ならびに「財務諸表規則取扱要領」が改訂されました。これは御高承のとおりです。これらに追隨して法人税法など税法関係の改正も次々に実現されつつあります。

この度、これら一連の企業会計法規の改正に即応するため、本辞典の編集委員の精力的な協力をえて、全ての項目の見直しを行い、かつ財務会計領域の約 140 項目、税務会計領域の 110 項目につき全面的な修正・書き直しを行いました。かくして本辞典を常に最新の会計大辞典として学界、実務界に提供しようという私共の念願を果たすことができました。

本辞典は初版以来、小項目徹底解説主義をとり、項目の検索の簡便性と読み易さの保持に留意していますが、第三版でもこの方針を堅持しております。上述のような修正・書替の作業が素早くなしとげられ、本書を激動する制度会計によく対処した辞典、情報化時代にふさわしい辞典たらしめえたことは私の最も欣びと

2 第三版の刊行に当って

するところであり、編集委員諸氏及び出版書肆に対し衷心感謝する次第であります。本辞典が広く活用されることを期待し、読者諸賢から限らない御愛顧を賜わるよう念じております。

昭和57年 9 月

編集代表 番 場 嘉一郎識

新版の刊行に当って

この会計学大辞典の第一版は、中央経済社の創立20周年の記念事業の一つとして1971年1月刊行されたのであるが、幸いにして江湖の好評をはいくし、ここ8年の歳月にわたって何回となく刷りを重ねることが出来た。この間、会計及び会計学の進歩変転は甚だしく、昭和49年には商法計算規定の大きな改正、企業会計原則の大幅修正があり、その後、連結財務諸表原則及び規則、中間財務諸表作成基準及び規則、中間財務諸表監査基準などの公表、連結監査及び中間決算監査の実施に必要な監査証明省令の改正が行われたのみでなく、外国為替レートの変動制移行とレートの激変に伴って外貨資産・負債等の換算に関する一般的な処理基準をどのように策定するかという問題、日本公認会計士協会の国際会計基準委員会への参加に伴ってわが国の企業会計基準と国際会計基準との整合性をいかにして保つべきかという問題、ここ10年間に及ぶ世界各国でのインフレーションの昂進とこれに対処して妥当な会計情報をどのような方法で提供すべきかという問題、企業の社会的責任論をふまえて企業会計はこれにいかに対応すべきかという企業会計論上の問題等々が抬頭しているのである。

このような会計及び会計学の世界の顕著な変容に直面して本辞典の編集者は旧版の全面的な改訂を行う必要を痛感するにいたった。たまたま1978年は中央経済社の創立30周年に当るので、そのときまでに改訂の作業を終了して、新版の出版が可能になるようにしたいという出版社の意向をくんでタイム・テーブルを作成し、一昨年来、改訂作業にとりかかったのである。

新版における項目の分け方は第一版とほぼ同様であり、先ず会計及び会計学の全領域ならびに若干の隣接科学領域を次の19の部門に分け、これを大項目とした。

- | | | |
|----------|----------|-------------|
| 1 企業会計 | 2 財務諸表 | 3 流動資産会計 |
| 4 固定資産会計 | 5 繰延資産会計 | 6 負債会計 |
| 7 資本会計 | 8 収益費用会計 | 9 簿記および会計組織 |
| 10 原価計算 | 11 管理会計 | 12 会計監査 |

- 13 業種別会計 14 税務会計 15 マクロ経済会計
 16 会計数理 17 会計法規・会計団体・会計学者 18 管理科学
 19 EDP会計

次いで、これらの大項目のそれぞれについて、可能なかぎり適当な中項目をたて、さらに各中項目ごとに数多くの小項目を配列するという方針をとり、選定項目に重大な脱漏のなきことを期しつつ、第一版と同じく、徹底した小項目主義の辞典を作成することにしたのである。ただしマクロ経済会計の部門では便宜上、おおむね中項目主義を採用し、小項目をたてることを避けた。

この版の中項目の数は64、小項目の数は3,382に上り、小項目数において第一版より370余り増加している。これでわかるとおり、新版は新項目を取り入れて辞典としての内容を著しく充実させているわけである。

新版の編集に当っては、私が編集代表者となり、委員として旧版に名をつらねている5氏のほかに、新たに一橋大学の岡本清教授の参加を乞い、陣容を強化して作業をスタートさせたのであるが、途中で明治学院大学の土淵健一教授が病に倒れ、ついに不帰の客となられた。前途有望な若い学徒の早世を惜み、ここに衷心、哀悼の意を表するものである。

編集委員の方々とは過去3年間にわたり本務の余暇をさいて、収録項目の選定・補正、執筆方針及び執筆要領の決定、執筆者の選定、付録におさめる会計諸法令の選択、ゲラ刷の校正などの作業に献身的な尽力をされ、本辞典の製作プロセスを当初のスケジュールどおりに進行させ、この新版を誕生せしめたのである。

ここに編集委員の氏名、現職を掲げて、その労を多としたい。

＜編集委員＞（五十音順）

成蹊大学教授	新井 益太郎氏
一橋大学教授	岡 本 清氏
成蹊大学教授	武田 昌輔氏
一橋大学教授	中 村 忠氏
一橋大学教授	森田 哲彌氏

また集録項目の選定作業には、編集委員のほか6名の方に編集協力者としてお力ぞえをいただいた。このことによって本辞典の項目体系の一段の充実化をはか

ることができたのである。ここに編集協力者の氏名、現職を掲げて、そのご好意に対し深甚なる謝意を表したい。

<編集協力者>

マクロ経済会計	一橋大学教授	倉 林 義 正氏
管理科学	一橋大学教授	宮 川 公 男氏
会計数理	東京農工大学教授	藤 澤 袈裟利氏
E D P 会計	公認会計士	伏 見 章氏
銀行簿記	日本興業銀行総務部参事	小和田 国 幸氏
銀行簿記	日本興業銀行トロント駐在員事務所主席	廣 瀬 信 幸氏

19部門にわたる 3,382の小項目の執筆には 276 名という多数の専門家のご協力をえている。そのご氏名は巻頭に掲げてあるが、本辞典に対して寄せられた学界、実務界のかくも幅広いご支持には感念一入なるものがある。

そもそも、本辞典の第一版は、この新版の編集に当たった私どもの恩師である故 太田哲三先生の発意によって編集刊行されたものである。先生は若い頃から簿記会計の辞典を作ろうとする熱心な意欲をもたれていた。本辞典の第一版の刊行趣意書（昭和42年8月）の中で、先生は「多忙な実践家及び学者にとって必要項目を……容易に探し出せる辞書形式は、結局、唯一の参考書となるものであるとの信念の下に、最高水準を示す会計学辞典を完成することは、私の長い間育ててきた夢でありまして、実際に企画したことも一再に止まりませんでした。たまたま、中央経済社の創立20周年を記念し、山下勝治君ならびに番場嘉一郎君が監修の労をとって下さることとなり、また、……新進の学者から編集者としての協力をえることになりましたので、ここに辞典の公刊に全力を傾倒することとしました。」と述べておられる。

先生は昭和の初期に某出版社から簿記会計の辞典の編さんを依頼されたが、項目のカードの作成を引きうけた人が根負けして挫折した。これを何とかしなければならぬということでこの某出版社に対して事態收拾の努力をされたのは昭和10年頃のことであったかと思う。私もこの仕事に動員されたので記憶に残っている。しかし遺憾ながらこの企ても流産に終わった。中央経済社から創立10周年のこ

ろに頼まれて先生は三度目のモーションを起されたが、項目の収集も大分進展したのに陽の目を見ないでしまった。しかし同社は創立20周年の記念事業の一つとして、懸案の辞典刊行を実現すべく、ふたたび先生に推進方を懇請した。これで先生は、ようやく念願成就にこぎつけられたのである。

先生は第一版の項目収集・整理に当っては若いものを督励して非常な努力をなされた。先生の喜寿の祝、鳩寿の祝の頃には常に辞典の進行状況に気を配られ、一日も早い完成を待たれたのである。第一版の原稿整理が終り、ゲラ刷が続々と出はじめた頃に先生は逝去された。監修者として名を連ねる筈であった山下勝治教授も先生に先だって他界された。第一版に監修者として名を連ねた佐藤孝一教授も先年物故された。

第一版の監修者でこの新版の編集代表として名を残すのは私のみとなった。時の移りの早いことには転た感慨を禁じえない。

会計および会計学の分野・領域は年とともに拡大し、そこに展開される理論も技術も新旧入り乱れて多彩を極める。それが1970年代であった。1980年、1990年代における変容も極めてスピーディーであろう。会計や会計学を学ぶ者は、旧い概念、新しい概念、旧い術語、新しい術語、旧い方式、新しい方式、そういったものにとりまかれざるをえない。私どもは専門家の総動員下に新装なったこの辞典の第二版が、さらにはまた第三版が、錯綜多岐の1970年代末期から20世紀末葉にわたる会計学徒・会計担当者にとっての、有用なツールとなることを期待するものである。

終りに創立30周年記念事業の一つとして採算を度外視して本辞典の新版の出版を敢行された中央経済社に対して深甚なる敬意を表する。

1978年清秋

編集代表 番 場 嘉 一 郎

刊 行 の こ と ば

会計および会計学を研究しようとする人々に便宜を与えるため、会計学辞典を作ろうという企てを今から十数年も前に一度したことがある。中央経済社の創立10周年の頃のことであつたかと思う。そのときには、編集委員が項目の選定・整理にコリ過ぎ、息切れして頓挫した。こんどは2回目の試みであつたが、前回の経験もあり、編集委員にも人を得て、項目の選定も順調に進み、かつ執筆には学界および実務界にわたる二百数十名の方々のご協力をえて、ここにようやく私どもが念願していた会計学大辞典を完成し、江湖におくることができた。会計学および関連諸科学を専攻される方々の総力が結集された結果の所産であり、監修者として感激おくあたわざるものがある。

本辞典では次のような会計および会計学の全領域ならびに若干の関連科学領域から項目が選定されている。

- | | | |
|----------|----------|-------------|
| 1 企業会計一般 | 2 財務諸表 | 3 流動資産会計 |
| 4 固定資産会計 | 5 繰延勘定会計 | 6 負債会計 |
| 7 資本会計 | 8 収益費用会計 | 9 簿記および会計組織 |
| 10 原価計算 | 11 管理会計 | 12 会計監査論 |
| 13 業種別会計 | 14 税務会計 | 15 社会会計 |
| 16 商業数学 | 17 管理科学 | 18 機械会計 |
| 19 会計法規 | | |

編集委員においては、これらの各大項目について、可能なかぎり適当な中項目をたて、各中項目ごとに数多くの小項目を収集・整理するという方針をとり、選定項目に重大な脱漏のなきことを期しつつ、徹底した小項目主義の辞典を作成することにしたのである。

本辞典の作成にあたっては、主として次の編集委員諸氏から前後数年

間にわたり、項目の選定、監修者の意見にもとづく項目の補正、執筆方針および要領の決定、執筆者の選定、原稿の整理および補正、校正などの作業に献身的な尽力をしていただいた。

成蹊大学教授 新井益太郎氏

成蹊大学教授 武田昌輔氏

明治学院大学教授 土渕健一氏

神奈川大学教授 中村 忠氏

一橋大学助教授 森田哲彌氏

ほかに項目選定に当り、社会会計については中央大学教授合崎堅二氏、会計数理については東京農工大学教授藤澤袈裟利氏、管理科学については東京工業大学教授松田武彦氏、E D P 会計については公認会計士伏見章氏、銀行簿記については日本興業銀行の大澤敏男氏および白川和則氏のご協力を得ている。

本辞典の成るにあたり、私どもは上記の方々のご好意に対して深甚なる謝意を表さなければならない。

私どもの念頭を去らないのは本辞典の監修者として何かと力を藉された故神戸大学教授山下勝治氏のことどもである。氏は関西の会計学の巨匠として偉業を遺されながら宿痾のために昨年他界された。ここに本辞典の監修者たりしことを識すとともに、この際あらためて故人のご冥福を祈る次第である。

会計および会計学の分野・領域は年とともに拡大し、そこに展開される理論も技術も新旧入り乱れて多彩を極める。それが70年代である。会計や会計学を学ぶ者は、旧い概念、新しい概念、旧い術語、新しい術語、旧い方式、新しい方式、そういったものにとりまかれざるをえない。私どもは専門家の総動員下に成ったこの辞典が、錯綜多岐の70年代における、会計学徒・会計担当者にとっての、有用なツールとなることを期待するものである。

終りに20周年記念事業の一つとして採算を度外視して本辞典の出版を

敢行された中央経済社に対して深甚なる敬意を表したい。

1970年清秋

監修者 太 田 哲 三
佐 藤 孝 一
番 場 嘉 一 郎

追 記

太田哲三先生には、立派に出来上ったこの「会計学大辞典」を手になれずに昨年他界された。先生の生前にこの辞典を刊行しえなかったことは、かえすがえすも残念であった。

先生が簿記会計の辞典を作ろうとされたことは今回がはじめてではなかった。先生がまだお若かった頃に某出版社から編さんを依頼されたが、挫折した。これを何とかしなければならぬということで事態収拾の努力をされたのは昭和10年頃のことであったかと思う。私もこの仕事に動員されたので記憶に残っている。しかし遺憾ながらこの企ても流産に終わった。本辞典の「刊行のことば」にも書かれているように、中央経済社から創立10周年のころに頼まれて先生は三度目のモーションを起されたが、項目の収集も大分進展したのに陽の目を見ないでしまった。しかし同社は創立20周年の記念事業の一つとして、懸案の辞典刊行を実現すべく、ふたたび先生に推進方を懇願し、ようやく念願成就にこぎつけたのである。

さる昭和42年8月に各方面に送られた辞典刊行趣意書の中で、先生は「多忙な実践家及び学者にとって必要項目を……容易に探し出せる辞書形式は、結局、唯一の参考書となるものであるとの信念の下に最高水準を示す会計学辞典を完成することは、私の長い間育ててきた夢でありま

して、実際に企画したことも一再に止まりませんでした。たまたま、中央経済社の創立20周年を記念し、山下勝治君ならびに番場嘉一郎君が監修の労をとって下さることとなり、また、……新進の学者から編集者としての協力をえることになりましたので、ここに辞典の公刊に全力を傾倒することとしました。」と述べておられる。

先生は「こんどこそ」という意気込みで昭和41年夏以来、新たに構想をねられ、大項目、中項目の検討・整理に当たられ、監修協力者や編集委員の選定を行なわれ、また小項目主義の辞典とすとか、辞典名を会計学大辞典とすとかいう意思決定をされ、小項目の選定を編集委員に委ねられた。

編集委員は、42年春から夏にかけて、会合をひらくことおよそ15回余り、委員外の方々にもある種のエーリアの項目選定に協力を仰ぎ、約3,000に上る小項目を確定した。この過程において、主任委員は随時、先生に項目選定作業に関する報告を行ない、諒承を求めた。42年8月に前記の執筆依頼状（刊行趣意書）が発送され、44年夏までには執筆者のほとんど全部から原稿を送っていただくことができた。この間、先生はきわめてお元気で、40年の喜寿の祝に続けて、43年には鳩寿の祝をなされた。このような集いの折にも、先生は気にかけている辞典の進行状況について何かと熱心にわれわれに尋ねられた。

この辞典の原稿の整理が終り、ゲラ刷の出始めた頃から先生は健康の不調を訴えられるようになった。寒い冬は切り抜け、春を過ごし、夏を迎えられたが、ついに昨年、7月4日白玉樓中の人となられた。この辞典は先生の大きな遺業の一つとして後世に伝えられるものである。将来、版を改めるときには、本辞典に先生の名を冠して「太田会計学大辞典」と呼称したいものと考えている。

1971年 早春

番 場 嘉 一 郎

執筆 者 (五十音順)

慶應義塾大学	會青	田木	義	雄脩	東京大学	江村	稔夫
名古屋工業大学	青青	木木	茂	脩男	横浜市立大学	遠藤	勝
早稲田大学	青青	木木	茂	男	大蔵省	迫島	留
横浜国立大学	秋	柳	文	司	明治学院大学	須田	夫
北海学園大学	浅	葉	国	利	日本大学	賀田	平
武蔵義塾大学	安	羽	二	郎	山大学	雄矢	純
慶応義塾大学	新	達	和	夫	大田	知	司
早稲田大学	新	井	清	光	大	藪	哉
成蹊大学	荒	益	太	郎	大	山下	雄
立教大学	有	川	邦	壽	大	岡部	敏
東京国税局	安	馬	憲	幸	岡	利	良
一橋大学	飯	藤	英	義	岡	正	文
駒沢大学	飯	岡	利	透	小	倉	清
中央大学	石	野	純	夫	小	崎	一
富士銀行	石	崎	定	夫	尾	澤	郎
明治大学	石	田	博	司	小	野	巖
早稲田大学	泉	塚	勝	美	小	古	人
大阪経済大学	板	谷	垣	忠	加	野	郎
山口大学	伊	丹	藤	之	片	藤	士
一橋大学	伊	垣	富	博	加	藤	弘
青山学院大学	稲	田	卓	男	可	児	彦
神奈川大学	井	上	達	次	兼	子	雄
中央大学*	井	上	久	雄	狩	野	三
日本大学	井	上	守	彌	鎌	田	勇
公認会計士	井	上	康	晴	上	村	夫
西南学院大学	井	上	賢	男	亀	山	郎
一橋大学	今	井	一	夫	河	合	敏
元東洋大学	岩	村	郁	太	川	口	一
関西中央大学	植	野	山	力	河	野	男
中央大学	内	山	英	夫	河	村	吉
横浜市立大学	宇	南					

神戶大學	河神	本森	一佳	郎智	士理	櫻井	井井	四通	郎晴
松山商科大学	河神	本森	一佳	郎智	專修	櫻井	井井	四通	郎晴
松山商科大学	河神	本森	一佳	郎智	東京	櫻井	井井	四通	郎晴
広島修道大学	河神	本森	一佳	郎智	学院	櫻井	井井	四通	郎晴
元東京大学*	河神	本森	一佳	郎智	上智	櫻井	井井	四通	郎晴
冲縄経済大学	河神	本森	一佳	郎智	千葉	櫻井	井井	四通	郎晴
経済研究大学	河神	本森	一佳	郎智	中央	櫻井	井井	四通	郎晴
専修大学	河神	本森	一佳	郎智	横浜	櫻井	井井	四通	郎晴
小樽商科大学	河神	本森	一佳	郎智	産短	櫻井	井井	四通	郎晴
一橋大学	河神	本森	一佳	郎智	横浜	櫻井	井井	四通	郎晴
元神戸大学*	河神	本森	一佳	郎智	長崎	櫻井	井井	四通	郎晴
松山商科大学	河神	本森	一佳	郎智	早稲	櫻井	井井	四通	郎晴
明治学院大学	河神	本森	一佳	郎智	東洋	櫻井	井井	四通	郎晴
一橋大学	河神	本森	一佳	郎智	筑波	櫻井	井井	四通	郎晴
青山学院大学	河神	本森	一佳	郎智	横浜	櫻井	井井	四通	郎晴
横浜国立大学*	河神	本森	一佳	郎智	明治	櫻井	井井	四通	郎晴
神戸大学	河神	本森	一佳	郎智	関西	櫻井	井井	四通	郎晴
慶応義塾大学	河神	本森	一佳	郎智	桃山	櫻井	井井	四通	郎晴
学習院大学	河神	本森	一佳	郎智	成城	櫻井	井井	四通	郎晴
関西学院大学	河神	本森	一佳	郎智	甲南	櫻井	井井	四通	郎晴
金沢国科大学	河神	本森	一佳	郎智	関西	櫻井	井井	四通	郎晴
滋賀大学	河神	本森	一佳	郎智	東一	櫻井	井井	四通	郎晴
神戶大学	河神	本森	一佳	郎智	明一	櫻井	井井	四通	郎晴
明治学院大学	河神	本森	一佳	郎智	日本	櫻井	井井	四通	郎晴
東京工業大学	河神	本森	一佳	郎智	日興	櫻井	井井	四通	郎晴
国税庁	河神	本森	一佳	郎智	早稲	櫻井	井井	四通	郎晴
亜細亜大学	河神	本森	一佳	郎智	西南	櫻井	井井	四通	郎晴
成城大学	河神	本森	一佳	郎智	東京	櫻井	井井	四通	郎晴
名古屋大学	河神	本森	一佳	郎智	神戶	櫻井	井井	四通	郎晴
早稲田大学	河神	本森	一佳	郎智	京大	櫻井	井井	四通	郎晴
明治大学	河神	本森	一佳	郎智	慶義	櫻井	井井	四通	郎晴
神戶商科大学*	河神	本森	一佳	郎智	成蹊	櫻井	井井	四通	郎晴
和歌山大学	河神	本森	一佳	郎智	創価	櫻井	井井	四通	郎晴

(* 名誉教授)